音楽教育と人間形成

瀬戸　尊

音楽が人間形成に重要な役割を果たしていることは既にいいつくされ考えつくされているのだが、音楽教育ということになると、これを概念的に論じることはできても実際問題として反省すると、なかなか簡単に割り切れないことが多い。

一口に音楽といえば、高級な芸術であって人間生活とは不可分の歴史をもっている。いま考えようとする音楽教育は、学校とか寺院とかで音楽を教えることに関係してくるので一般音楽そのものの価値とか影響とかいうこととは別に、教育そのものの目的を見出し、それにしたがって内容方法が計画されることになってくる。もちろん学校における音楽教育にも歴史があって二十年前と現在とでは自ずから目的も幾分変遷してくるのは当然であろう。

昔は、特定の歌を歌えるようにすれば、人間形成の一翼を荷なうことができるとしたこともあったであろう。その時代には特定の歌を歌うことすら子どもには難しかったのであった。そのためには専門の先生が雇われて独特の方法で教授したのであった。いうところの口授法である。口移し法である。社会にレコードやラジオが行き渡って、聞き覚えする機会ができてくると、聴唱法ができるようになる。さらに、楽譜を用いて自分で新しい歌が歌えるようにしたいとして長い間、苦心を重ねたことである。音楽環境も整っていなかったし、子どもの感覚や心の働きなどについて少しも考慮しない論理的な方法が押しつけられたから子どもも大へん苦労をしたことである。

やがて、子どもを理解していた先覚者がいろいろ方法上の改善をしたので戦後は徐々に楽になってきたのであるが、改善された

方法だけが伝わっていって肝じんの子どもの理解を怠ってしまう場合もないではなかった。

まして人間形成の一翼となるために、音楽教育はどんな役割を果たしているのだろうか。音楽教育がただ技術や知識の伝達に腐心しているだけで充分であろうか。指導の方法が改善されて、おぼえることが楽になると今度は教材を高級なものにして、より複雑な音楽の演奏に取り組みはじめる。教師自ら感動して満足しようと努力するが子どもはどうであろうか。

小学校の低学年の子どもに「音楽はすきですか」ときくと、大体の子どもは「好き」という。中学年になると通信簿でよい評点をもらっている子どもは好きだという。中学校の生徒は、「音楽は好きだが、学校の音楽は嫌いだ」というものもある。

文部省は、「楽しく歌う」と注意書きを添える。ある識者は、幼少の時は、どんなに苦労しても、訓練をやりぬけば後で楽しくなるから、教育としては、やりぬく根性が大切だという根性論を掲げて、楽しくない音楽教育を礼賛する。

いつまでたっても技術一点張りの教育からはぬけ出る余裕がない。相当の識者でさえ、音楽には厳正な規範があるから、絵画のようにはじめから自由という活動はない、どうしても正式に技術を伝達されねばならないとしている。正式な技術ということでは、専門家といわれる人々には頭が上がらない。学校という格式の高いところでは一層その観念が強く、支配的であるから、専門家と称せられない一般の教師が如何に劣等感を抱き、ビクビク音楽を指導していることだろう。何か間違いでもしているのではないだろうか、誤りを伝えているのではないかという自信喪失が、いよいよ音楽指導を硬くしているのではないだろうか。自信のないところに人間形成などという総合的な大目標を達成する余裕など少しも意識できず、その日をようやく過ごしている場合さえ多いのではないだろうか。

一方、専門家と称する人々は、正しい技術を伝えようとして努力をしているのだ。正しい技術にこだわって、時には、習う側の苦労のほども感じとる余裕もなく、徒らにあせって、音楽を苦にしたり、きらいにしている場合もなきにしもあらずであろう。これでは人間形成とは別の時間だと考えられる。

静かに話し会う研究会では、「音楽教育は専門家をつくるのではない、音楽経験を豊かにし、音楽感覚を醒めさせ、美に感動する情操の教育をするのだ」と合意する。この静かなる高き合意点を、どのようにして達成しようとしているのか。ある識者はいった。「音楽を教えるのではない、音楽で感動させるのが音楽教育のねらいだ」と。また、ある識者は「音楽を教えることはできな

い。自分で音楽を自分の内に創るように導くことなのだ」と。

音楽の教育説にもいろいろな立場があって、音楽教育は「若干の専門家と大部分の鑑賞者をつくる」のが目的だと結果論を目的論にすりかえている識者もあるという現状である。

さて、音楽や指導者の側の論議を別にして、幼児の成長過程を瞥見してみよう。

母親のことばや歌声をきいて次第に音感覚が発達してくる。二歳前後ともなれば、家族の歌う声や、演奏する楽器の音や、テレビの光音に反応して、頭をふり、足をふみ、手を屈伸して、模倣唱する。その楽しそうなことといったら、その器用さといったらただ恍惚としてしまうくらいである。

その上「パパも」「ママも」「ばばも」「じじも」と指名して同調させる。近頃は歌ったことのないつつましい祖母も、厳格な祖父も、遠慮勝ちな嫁も、同調せざるを得ない。同調すれば案外楽しいことがわかって年寄りも顔を紅潮させて上機嫌になる。みんな仲よしである。一家が生々した平和な心になる、愛情がこみ上がってきて、みんなの心の中に流れる。こんなフンイキを十年も、二十年もいや三十年も家庭に、学校に社会に持てたらと誰でも思うだろう。

この子どもがやがて幼稚園にはいっていく。

手をつないで歌をうたう。リズムにのって走りまわる。音楽を聞きながら絵をかくし、お話もきく、粘土や紙で製作をする。

ここで音楽の指導という考えが働いてはいるが、いわゆる世にいう指導の形態をとらないであろう。先生もみんないっしょに同調するのである。厳正な批正や叱声は聞かれない。すべて子どもが感得できる可能性に応じて説明できない体得による吸収力で成長していくのである。楽しい毎日である。もし音楽の専門家にいわせたら、音程は不確かでありリズムは数学的に不正確であり、発声は地声であり、テンポはイレギュラーであり、それらを批正しない教諭の音楽性の低さに、あきれてしまうかも知れない。

音楽の教育は、そんなものではないというであろう。教育である以上は目的があって、カリキュラムがあって基礎的な積み重ねがあるべきだというであろう。

基礎指導のない音楽教育はないとさえいっている識者もあるくらいであるから、幼稚園の音楽をみてあきれるのも無理はない。しかし、幼稚園の音楽は、あそびではあるが音楽の基礎教育である。あそびであるから強制されない。自由な参加であるから苦しくない。むしろ楽しい友だちづくりの火花であり、心ゆくまで開放される動きでもある。しかも音感覚やリズム感覚の醒めが旺盛

な年頃だから、そして音楽を楽しむことだから、りっぱな基礎指導にほかならないのである。

機械的な音程練習や発声練習や、リズム訓練や聴音練習などだけが基礎指導だと考えるのは、技術一点張りの音楽教育者のこだわるところであって、根性論や天才論などが根底にあって、選ばれた子どもを目あての教育に偏するのではないだろうか。もし人間形成という教育の究極的な大目的を考慮して行なう音楽教育であるならば、いま述べた幼稚園音楽をもっと大切にして発展させないと、いわゆる教科主義のバラバラな教育を導入することになってしまう恐れが多分にある。

例えば、近時、幼稚園にも器楽合奏の指導が導入されている。うれしいことであり、ごく自然であって、もっと早く導入されねばならないはずのものであった。

これが盛んになるにつれて、演奏の形態だけが持ちこまれている心配はないだろうか。即ち、昭和の初期にわが国で芽を出した小学校の器楽合奏が、子どもの自然の要求で、楽隊あそびを子どもが創造しつつ自由に演奏したものが近時は、専門家がひどく高級な難しいものに作り上げる傾向があって心配しているのだが、それと同様に、幼稚園でも小学生の演奏形態そのままを持ちこんで仕込んでいるむきもあるやに聞いている。そうではなくて、子どもが、楽隊あそびを勝手に楽しむところに創造的な活動があるので、仕込んで形をととのえてしまっては少し淋しい感じがしないでもないのである。

もっと子どもの発想を大切にしてやりたいものである。「ぼくが太鼓を打つから、きみはタンブリンを鳴らしてね」という合奏でないとあまり大した意味がないのではないか。

もっと子どもの創造意欲を、子どもの遊びを大切にしてやりたいものである。

文部省で小学校の音楽に「さぐりびき」ということを示したのは、子どものあそびや、くふうを尊重したことなのだと解釈する人があまりにも少ないことを不思議に思うのである。

音楽教育は、技術を授けるだけが目的ではない、自分から美を追及する、美に感動する人間を形成したいのである。いや、もっと人と親しむ、人と協調する、心情を遠慮なく表現し得る。いや、もっと明るい心意の生々した創造性ゆたかな人間を形成したいのではあるまいか。

音楽は特定の人々の専有物ではない。本当の意味の全部の鑑賞者のために教育されねばならない文化である。

（文京区教育センター）